



近畿高等学校
演劇協議会

顧問創作に逆風が吹き荒れた年。それが二〇〇〇年の近畿大会を一言で言い表し、思い出させるキーワードになったのではないだろうか。大阪から、兵庫から、あの高校が来ていない…。そんな驚きと戸惑い、そして期待を込めて迎えた近畿大会であった。そして…。逆襲に転ずるのは果たして、顧問か、はたまた第三の勢力なのか。興味は尽きない。
近畿高演報第十四号では、昨年度行われた京都大会の講評と、劇作連絡協議会による優秀創作脚本選考の過程と結果を掲載する。

第三十五回近畿高等学校演劇研究大会 審査結果

【最優秀賞】

大谷高等学校 「私場所ワタクシバシヨ」 作 岡村寛子

【創作脚本賞】

大阪市立工芸高等学校 「正直カメラと日記爆弾」 作 益山貴司

最優秀賞校は全国大会（福岡大会）に出場

【第35回近畿高等学校演劇研究大会プログラム】

会場：京都市呉竹文化センター

- 第1日 11月24日(金) 印生徒、顧問、顧問生徒共同
- 上演1 京都A
京都府立洛水高等学校
「花咲け青春=三分咲き」作 江坂一平・赤羽鷹・中谷眞紀 補作 演劇部
- 上演2 大阪A
大阪府 大谷高等学校 「私場所ワタクシバシヨ」作 岡村寛子
- 上演3 奈良
奈良県 育英西高等学校 「見上げればそこに朝の月」作 塚崎 綾
- 上演4 兵庫A 兵庫県 親和女子高等学校 「雨のち晴れ」作 演劇部
- 上演5 大阪B 大阪府立堺東高等学校 「ジュン」作 大名光全
- 第2日 11月25日(土)
- 上演6 兵庫B 兵庫県立加古川東高等学校 「パレット」作 山岡潤平
- 上演7 和歌山
和歌山県立熊野高等学校 「ひとりぼっちじゃない。」作 田中 円
- 上演8 滋賀
滋賀県立長浜北高等学校 「眠れる時代(とき)よ!!」作 高橋 舞
- 上演9 大阪C
大阪市立工芸高等学校 「正直カメラと日記爆弾」作 益山貴司
- 上演10 京都B
京都府立城南高等学校 「二百十日」作 山瀬麻友
- 第3日 11月26日(日)
- 上演11 福井
福井県立丸岡高等学校 「四月になれば彼女は」作：成井豊・真柴あずき
- 上演12 徳島 徳島県立城東高等学校 「しょうてん」作：田上二郎
- 上演13 三重 三重県立神戸高等学校 「ハルカ・・・」作：笠井飛鳥
- 審査員： 専門審査員 2名 西村 博子（園田学園女子大学教授）
岩崎 正裕（199Q太陽族）
顧問審査員 各府県選出高等学校演劇部顧問 6名

第三十五回近畿高等学校演劇研究大会講評

2000年11月24日(金)

上演1 「花咲け青春=三分咲き」

西村：脚本を読ませてもらった時に、説明なんか一切抜いて、極端に短いセリフで、よく描き分けられていて、「上手いなあ」と思いました。ただ残念だっ

たのは、こんなにいい脚本で、そしてこんなに照明も装置も手作りの良さで、テントひとつの縫い目から葦簾から石垣から街灯から本当に実に神経細やかで演劇創りの喜びというのがあって全部いいのに、ちよつと演技の方が練習時間が足りなかつたんじゃないかなあという気がしました。すぐ半円形作つたりすぐベンチにじつと座つてしゃべつたりしないで、何かもつと工夫はないかいろいろやって欲しかった

なあと思いました。

あとひとつ、惜しいなあと思ったのは、一番はじめの花火と最後の焼き肉の匂いですよ。これはこういうところじゃ出来ないんだから、ほんととははじめちょっと暗くしといてみんなが線香花火でも實際火が使えて、最後演説しているうちからもう焼き肉始めて匂いが客席に伝わって、ほんととあり得ないような私達にとってはユートピアみたいな、実際はそんな恋をしたかどうかかわかんないけど、失恋もしたかどうか分かんないけど、毎日の生活の中で忘れてしまったある懐かしさというものを確実に伝えるためには、線香花火が使えなかったのは、焼き肉の匂いが河原からふわあど流れるのが出来なかったのは、ちよつと残念だったなあと思いました。これは舞台条件のせいです。

岩崎：ほんとユートピアですね。原風景って言いませうけど、だからちよつと演技も実際の皆さんの生活と違つところでやってやろつという意識が面白かつたんです。つまりそれは、自分たちの生活そのものを一回離れて見てみるとこついうところもあるんじゃないのつていうことをコメディイにしてんだなというふうに見られたので、それが僕はすごい面白かつたんです。

そしたらね、今度はその面白いシーンと、青春ラブコメディイがどこで面白くなるかというところ、コントラストなんです。笑えるシーンとじつくり恋愛を語んなきゃいけないシーンとの対比が大事なんだよね。そこで言うところ、ベンチがあつて真ん中に階段があつたらどれくらい距離で離れてその男女がしゃべつてんの、どのセリフで近づくの、どのセリフで手を握るの、つていうことがもつとあつてよかつたのかなつていう感じがするんですよ。そこを高校

生の知恵で世界最高のラブコメを創つてやるぜというくらいに気合いまで突き抜けてくれると最高になつたなという感じがするんだよね。そういうの創るためにどうしたらいいかと言うと、漫画のラブコメじゃなくて、實際戯曲で描いてあるコメディイをよく読んだほうがいいんです。



「真夏の夜の夢」もそつですし、チーホフはコメディイではない、本人はフアルスつて言つてるけれども「かもめ」

つていう作品も結局恋の追いかけてこつこが描かれてたり。そうするともつと舞台のワンシーンを長く創れるようになってくると思うの。洛水高校のは青春ドラマとしては面白かつたけれども、シーンの終わりが短いから、どんどんそれが増幅していくようになんないところがあつて、もつたいなかった。その辺の緻密さを増せば、世界最高のラブコメになつたんじゃないかという感じがしました。

顧問：まず、台本のタイトルを見て、面白いなあと思つて。しかもその次に「三分咲き」つてとどめ指すようなタイトルが来て、非常に楽しく観させてもらいました。非常によく出来ていたなあと思つたのが、お花屋さんのセットと街灯ですよ。街灯の明かりですとか花屋さんの中から外へ向けていくライト、非常に効果的で良かつたと思うし、そういう大きな道具だけじゃなくて小道具が非常にびりつと利いていたと思います。たとえば時々出てくるメロンアイスは、それからあとヒマワリですか、上演されたのが二日前と思えないくらいメロンアイスは非常に頭に残つていて、すごくインパクトがあつていいムードを出しているなと思つて、楽しく観させていただきました。

それから後、たくさん登場人物が出てくるんですけど、それぞれの持つてくる背景がよく出ていて良かつたと思います。

厳しいことも最後に言わせてもらいますけど、つなぎですね。「常に蟬」というのとか、セリフの間がかみ合わなかつたりとか、はけるときの走り方が単調であつたりとか、そういうところはこれからまだまだ勉強していただいたら、もつと楽しい作品になるのではないかと思います。

上演2 「私場所ワタクシバシヨ」

岩崎：最初から度肝を抜かれました。ダンスがある芝居は今回多かつたんですけど、一番良かつたですね。僕はすつと言葉の問題をしゃべつてますけど、言葉というのは強いなあど、皆さんの現在ときちんと繋がつて見えてくるんですよ。言葉ですごく成功し

ている。説明しなくても身体と言葉が繋がっているから、説明以上の力が舞台にある。大谷高校の場合はそれがものすごく成功していた。

今の演劇の特徴かもしれません。この作品でも二つ時間が同時進行しますよね。「いなくなった」「逃げなきゃいけない」というのが最初交錯するんですが、ここがちよっと分かりにくいんだよね。最初探している人がいて、それから学校みんなが集まってくる夜のシーンがあつてというふうになれば解消されるのかなあと思ったり。でもそうすると、ダンスで始まって教室というのがインパクトなくなっちゃうしとか、これは皆さんで今後新しい作品を創る時に考えてもらったらいいと思うんですけど。これは普通に考えると、高校生たちがおばあちゃんを探していた時間というのは2050年と捉えればいいのかしらと思ったりするんですが、そうすると50年後もあんまり変わってないし、じゃどう理解しようかしらと思つた時に、「ああそうか。大谷高校の『わたくし場所』というのはそういう時間とか辻褄とかはいったん横に置いてるんだ」と僕は理解したんですね。だって全部最後のセリフは「かもしれない」で繋がられてるわけだから、結局あなた達の現在がこの作品で描かれてるんだっていうふう理解して、何だかすっきりしました。

何かほんとに力がある。始まりで百恵さんがいる時に、「これは藤山直美だなあ。この人が一番インパクトあるんだなあ」と思つて観ていたら、また聖子さんっていうまたすごいインパクトある人が出て来て、ものすごく稽古をしていることが見えて、演劇の力が見えるいい作品だったと思います。

西村：終わって、ロビーで煙草すってる後ろの女の子達が「すごい」「すごい」とか言つた。ほんとにその

通り。

「描き方教えて下さい」っていう質問が来ましたよね。それから「ああやって身体動かすのにどういう練習してるんですか」っていう質問出ましたよね。観てる人もよく観てたし、演る人も実によく演つてたし、演劇の面白さをたつぷりと味合わせてくれた



すてきな作品でした。一番始め客席から「きゃー」とか言つて出て来た時は「やばいな」と思つたんですね。「うあ、よくあるやつ?」と思つて、その後居場所取り合うのもきれいじゃなくて、最後までキャキャやるのか」と心配してたらとんでもない。その後の踊りで、一人ひとりが魅力あって、「どの子観てよか」ってくらいよくなって、あそこでキュッ

とお客さんを引きつけちゃつて。「時」の方から言うと、こんな時間がワープして、そのことが単にワープしてるなという理解じゃなくて、感覚で先に来ちゃつた面白さでした。そういうのは例えば幽霊の出し方。逆さの幽霊が出ることによつて、始めに知らん顔してたのが3番目に出

る幽霊だったなんて上手いし、実にいるんなことから、テンポ、リズム、言うことなく面白かったです。ただ後、絶対声を工夫して下さい。「きゃー」じゃなくて、音量ではなくて。能力のある子たちですから、具体的には先生に教えてもらつたりして。それから、もし希望が叶つたら色です。色が汚い。音の感覚と色の感覚が出たら演出のテンポ・リズム・脚本、言うことないので。最後にもう一つ、最後に演劇が終わつた後みんなが出た時にすごくきれいだったんです。だからおばはん演ろうと何しようかと、きれいなのがバアーと変わる役者の魅力をいかに見せるかがあつたら完璧です。

顧問：顧問の間で出ていた話をさせてもらいます。絶叫の時にセリフが聞こえないのを、ひとつは「聞こえなくてもええんやないか。それくらいの迫力があつた。それだけの舞台が創られていた」という意見と、「やっぱり聞こえへんのはまずいんちゃうか」と。どっちがいいのか結論がつかないまま終わってます。それから最後のシーンなんですけども、おばあさんの方が良かったのが高校生のまま出て来た方が良かったのかなあというのが、あんな高校の舞台の方で一人ひとりのキャラクターを創つたらなら、おばあさんも、もっと元気なおばあさんもあるだろうし、みんなおんなじような年取つたおばあさんになつちゃつてたんで、そこがちよっと惜しかったなあという話が出ておりました。

まだ完成版やないと思いますので、色々チャレンジしてみして下さい。

上演3 「見上げれば そこに朝の月」

西村：終わってすぐに審査員席によく声が聞こえてほつとして「良かったなあ」と思いました。私の感想から言います。舞台は多分学校だと思っんです、部屋だと言っておられましたから。部屋で徹夜して明け方まで、本当は三人でやる芝居を一人欠けたので、書き直さなくてはならない、眠いのと悲しさで、でもやらなくちゃならない、そういうふうな中でサヨちゃんが出てきたり、お月様がゆがんできたり、い



ろんなことがあります。これはある意味ではネムネムのレム睡眠みたいな感じがとても良かったらとも良かったらと思うます。せつかくいい可能性のある作品を普通のリアリズム、写実劇のセリフ劇みたいにやっちゃったところが惜しい。惜しいけれど、すくいい可能性がります。たとえばサヨちゃんという不思議少女が出て来ちゃってそれがちつともおかしくなく

居を書きたいと思っていて、それが明るく朝までに出来たかどうか分からないけれど、夢の中では何故かそうやってる。実は学校に行くのに遅れながら、夢の中ではちゃんと電車に乗っている。そういうふうな、実際には出来ていないのに頭の中では出来ているというような不思議感覚が全体で出たら、これはすごく面白くなるだろうと思いました。たとえば時計なんかでも、「あつ時計が止まっているんだよ。サヨちゃんが電池を入れたら動き出したんだ」なんて説明をしてないで、止まっていたのにやっぱり不思議な夜はユイちゃんが思い出したらちゃんと動き出したというほうがよいのであって、説明だなあとと思うセリフはカットして、客席が共々、眠くなった書がなくちゃと思ったり、最後に削ったり、というリズムが出たら最高だと思いました。

岩崎：演劇には必ずシンボルというものが存在しています。この場合、ユイがいなくなった、その残していったもの、シンボルとして時計っていうのがすくくうまくいっていると思えます。いなくなった時間であるとか、二人にとって空白になった時間とかを表している。これはシンボルとしては非常に上手くいっている。で、それが出て来た。電池入れれば動き出す。これは、戯曲を書く時によく言われることです。が、「説明するな」ということを偉い人からいっぱい説明されます。ではどうすれば説明にならないのかその辺が難しい。たとえば、それがシンボルとしてドラマの中でどうしても必要なんだしたら、ユイと思いの出の中でどういうふうな止まっちゃたのかということを書けばドラマの中で語る必然があるんですよ。けんかの時にどつかにぶつけて止まっちゃたというエピソードならば、その夜二人が台本を共

作している時に話す理由があるかもしれない。けれどそうやっていないから、シンボルとして上手く機能しているにも関わらず、その理由が戯曲の中で立ち上がってない。だから、「惜しい！」という所なんです、ここは。その、惜しい！というのがものすごくあるんです。

たとえば、三人にしたのはものすごく発想がいい。三というのは完全な数字を表すとよく言われます。水戸黄門には助さん角さんがいて、「マクベス」の魔女も三人だし、三の中のひとつが欠けたところにさよちゃんという子供がやって来た。これはうまくいっているんです。ところが、さよちゃんがもうひとつ不思議な存在だけで終わっているところがあったりないんだなあ。この人は高校一年生なのに、本当に小学生に見えるというすごい存在なのです。ということ、小学生に見えてたものがじゃあもう一回高校生に見えるという瞬間があってもいいわけですね。そういうすり替わりというか、劇的に手品みたいななんかすり替わっちゃう世界が夜の演劇部の部屋で起きると、僕なんかもうすごいドキドキするんです。それが月に繋がっていくとかあれば、劇中劇がもつとすつとはまってくるのかなとかいう感じです。

演劇の台本を共作するというのはすごく難しいことですね。僕もこの間やってなかなか上手くいかなかったんですけど、ほんとに夜こもって三人で台本を書いたんですね。そうしたらどういことが起こるかかって言うと、結局書いてる時間より、しゃべっている時間の方が長いんですよ。「こつこつアイデアでやったらどうだ」「こつこつアイデアでやったらどうだ」ということをやっぱり言い合うわけです。劇の中では意外と二人とも落ち着いて自分の家で宿題をやるようにノートに向かい合っていたけれ

ど、あの部分がセリフのやり取り、「こつこつ」と書
「こつ」「こつ」と書「こつ」というようになってく
ると、もつと劇としての力を持ってくるんじゃない
かと思っただけです。だから、セリフはよく聞こえ
し、構成もよく出来てるし、けれど、やはり「惜し
い！」という感じ。そこは技術的にいっばいい
っばいい頭使っただけ、すくなく、宮沢賢治とか
に迫る月とか星だとかが上手く人の心にしみてくる
作品になるんじゃないかと思いました。

顧問：この舞台はたった三人で演じられていた。たつ
た三人というのを非常に見事にそれぞれの役割を持
って演じ切ったというところにまず大変感心しまし
た。場面の設定が深夜の部屋という所、合宿という
設定ですけれども、深夜に自分たちが普段活動して
いる部屋で自分たちの台本を書いていくなんて大変
すてきなわくわくするような感じ。そういうと
ころは何が普段と違う精神状況が生まれてきます。
その中でこの二人の演劇部員達の物語が展開してい
くという設定が大変魅力的であると感じました。
そこに現れてくる十歳のサヨちゃんという子が、本
当に十歳に見えて、小柄という身体的な特徴ももちろ
んあるんですけども、それだけじゃなくて、動き
とかしゃべり方というのが小学生のような動きをあ
らわして、とても生き生きとしてすてきな感じだ
という風に思いました。高校生二人と小学生という関
係が非常にハッキリと目に見える形で出ていたと思
います。

もうひとつ感心したのは、キチンと会話が成り立
っている心地よさということです。特にこの二人の
演劇部員達が、いなくなつたユイさんという人を巡
って感情のぶつかり合いが出てくるところがすく
納得できる形で目に見える。けんかするほど仲がい

いとが言われたりすると、これも非常に納得の
いく形で舞台上に表れてくるというのは、この人た
ちがセリフをキチンと丁寧に演じている強みだと思
いました。

脚本として中盤が少し平板になってしまつて盛り
上がり欠けるところがあったなあと感じたので、
セリフも非常にいい感じで聞こえてくるのですけ
れども、テンポが一定になってしまつていて、息が合
つてくるんですけど、合はずぎている。もう少し壊
していくところがあつてよかったんじゃないかと思
いました。

ユイさんの代わりとしてサヨちゃんがユイさんを
演じて、代わりに高校生の中に入っていくところ、
その移り変わりがもう一つはつきりしなかつたこ
ころが残念でした。もうひとつは、劇中劇が一番ラ
ストに出てくる、この人たちが書いているお芝居の
中身が最後に出てくる、これが舞台を見ていて私に
はよく分からなかつたです。「あつ、これがこの人
たちが書いてる舞台なんだ」ということがよくつか
めなかつた。その中で非常に大切な恒星と惑星の違
いとが、私は衛星なんだという言葉が出てくるん
ですが、これがこの人たちの書いている台本の中身で
あるということがもう一つハッキリ分からなかつた。
何か今までの話の続きなのかなあと見えてしまつた
ところが構造上ちょっと惜しいなと感じました。

上演4 「雨のち晴れ」

岩崎：これは始まる前パンフレットを見て、「どつつかで
見た名字だなこれは」と思つて、全部観たら、「あつ
総理大臣じゃないか。何で総理大臣の名前がついて
んだらう」と思ひながら、観始めました。やはりそ

こにはそこには意味を見つけたんですね。僕は。そ
れはそういう風に描いてんだからさうだろつと皆さ
んおっしゃるかもしれないけれど、後ろにあるのは
幕あいの質疑応答で「あれは換気扇です」と言つてら
した。「さうか換気扇か」というので、僕の中で繋が
つてきたんです。最後のセリフがね、窓を開けて風
が吹き込んできて、「ほこりっぽい」とか言う、要は
廃校になる学校っていうのは自分たちが意見を言え
ないんだ、もつと風通しを良くしようよなんていう
象徴的な、これも多分シンボルだと思つただけど、
換気扇が後ろに置かれていたというのは発想のいい
とこなんだなと思いました。

これは学園のドラマなんだけれども、一種の政治
的な要素が結構あるんだなというふうに僕は観たん
ですね。そうすると、学校側がもくろんでることを、
生徒達があの手この手を使って、中でクーデターと
いう言葉も使われていたと思つたんですけど、革命を
起こして、そのためにはデマも流して最終的には内
部分裂をしちゃうんですよ。そこまではすくなく面
白かつたんです。そういう道筋を辿っていきながら
結構はちやめちやいたすらをやって、そのいたすら
が面白くて面白くて仕方がないんですけど、最後が反
省しちゃつたんですよ。やっぱりさうしなければ
いけないのかなと、僕はどうしても思つたんですよ。
みんなで創る演劇だからひとつの結論を持てばいい
と言えればいいんだけど、負けちゃつて「ごめんな
さい」と言つて、もう一回窓を開けて、それでいい
んだらうか。僕なんかは、せつかくみんなの意見が
分かれちゃつた訳だし、中に幽霊の女の子も居るわ
けだから、ある人はこちら、ある人はこちら、人は
ずっと一緒にいられないんだよね、やっぱり。廃
校になる今を留めておきたいという気持ちは良く分
かるんだけれど、絶対人は分かれていかなければい

けない。だからその別れ方が、最後のシーンに来るともつといいドラマになったんじゃないかと考えましたね。途中までが、あまりにも大人たちがおるおるする、高校生が頑張るドラマだったから、すごく期待しちゃう分ラストもうちょっとやってよというふうに思っちゃったというところかな。

でも、上手いです。いろんな構成がね。部屋に忍び入ってどうこうっていろいろんなドラマを進めていく小道具であるとか、ピストル持って拉致するとかいうところで結構笑わしてくれました。深刻なことを語っているんだけど、笑ってるうちにどんどんお話が進んでいく、これも演劇のすごい魅力だと思っただよね。その部分では成功してたと思います。

西村：これは、例えば今度の加藤さんでも森政権に本会議に欠席するぞするぞと言いながら最後しないでやっちゃったりしたことなのかな。この作品全部終わった時に先生方がおっしゃったのは、「この学生連アイデアは面白いんだけど一体クーデターやる気があったのかい、なかったのかい」っていうところが結構問題になりました。つまり、もしこれが、今の自民党政権なりが結局やるぞやるぞと言いながらやらない、コップの嵐やってるだけ、政権交代やってるだけ、それを笑おうとしているんだとしたら、すごい政治批判の作品です。でもそこまで行っていないんじゃないかな。もしそうなら最高。高校生おそるべしです。

この作品は、最後31ページの小淵さんの同趣旨のセリフが二つ、おばちゃんセリフが一個あって、吉田さんのセリフはいらないんじゃないか。この小淵さんのセリフが一応ドラマで言えば発見の場面ですね。「私達は廃校にさせちゃいやだからいろいろ

悪いこともした。だけど、私達は子供でした。飛ばたくない、大人になりたくない子供たちでした。ごめんなさい。だけど後悔はしていません。これからはしっかり前を見ることにしました。」と子供は二回も念を押してくれるんですね。その辺が観ている者はどういうふうに受け取ればいいのか分からないですね。一応クーデターっぽいことやりながらもこの子たちはいい子なのかな、結局はこの体制を全部認めて、単位もらって出ていく子たちの事なかれ主義がよく出てるのかな、とかいろいろ考えさせられました。私の勝手な希望を言えば、本当は、さつきからよく言ってる説明というのは、こういう場面なので、出来ればこういうセリフは全部とってしまっ、いたずらをした、それがいいか悪いかを客席が感じられると一番いいと思います。

二つやり方があると思います。例えば歌舞伎だと、悪なり何なりを舞台でいっばいやつといて、最後はお申し訳みためにこの世の中に順応しますみたいなセリフを入れて、舞台を悪の華いっばいにするんですね。意外とそれをやってくれたら魅力的だったんじゃないかなと思います。もしこのセリフを入れるんだしたら、ちゃちゃつとええ加減に入れといて終わらせた方が良かった。だって観ていたって、そう思った理由がないですもんね。悪いことした揚げ句、「これから前を見ようと思いました。」なんて。舞台に出てない訳ですから。ここで一番観たいのは何かと言えば、自殺すると言って校長先生の所に電話入れたら、人質ごっこやって校長先生を脅そうとしたら、鍵を盗もつとして入っていったり、先生に下剤入りコーヒーを飲ませたり、いろいろいい手がありますよね。あれなんか観てて私もやりたい今度やろうかしらと思っんですね。ほんと口で悪いことしましたとかレポリユーションするんじゃないかって、い

悪いじゃなくて、もしこの作品をもっと成功させるのだったら、観ている人の中で、どれくらいこの気持ち、「私もやりたい」、「おんなじ下剤入りを持ってたらドキドキする」を味合わせて欲しいと思っんですね。今まだいい設定をどんどん進んでいて、そのドキドキもなければ成功するかしんないかの客席の一体感もないし、いいアイデアなのにただ筋を進めて行くみたいです。これがあつた揚げ句悪いことしたけど発見になるかならないかは客席に任せていただいで、一番面白いところを芝居にして欲しいかっと思いました。

顧問：最初の「大人になりたくない子供です」というセリフがあるんですけど、子供であることを肯定しているのかなと思っ、昨日の『正直カメラと日記爆弾』という中で小学生が出て来て、小学生は早く大人になりたいと言っているんですね。高校生は大人になりたくないと言っている。これは何か違いがあるのかなと思っ考えたんですけど、やっぱり高校生ということ、社会に出るといってこれから現実が迫ってくるのかな。今の現実というのがかなり閉塞感があつて余り出たくないんじゃないか。そういう時代の風、雰囲気を見ていてるしているのかなと思っながら役名を見てると総理大臣の名前が並んでいる。これはすごいなと思っ読んでたんです。

舞台を観せてもらって感じたのは、セリフが心の底から出ている言葉ではなく、少し遊んでいる、逆の意味がある、逆説的な意味がある、あるいは皮肉っぽいというふうに観せてもらっただけです。言葉の意味とは逆の意味だったり別の意味が舞台上に現われてくると、皆さんが大人しくコップの中の嵐に治まっていくという結末が、逆にもっともっとほんと

は壊したいという意味に捉えられたり、題名の『雨のち晴れ』ということをもう一遍思い返してみよう、そうかこれは「雨のち晴れ」だけど、ほんとに晴れない、決して晴れないという暗い世相を表現しようとしているのではないだろうか、いろいろ考えてはみました。ただこれは勝手な思い込みかもしれない。でも、ただもう一度上演されることがあれば、こういうことを意図的に演出されても面白いんじゃないかなと思います。

上演5 「ジュン」

岩崎：この脚本を書いた人は未恐ろしい人ですね。まず、僕はそう思った。パンフレットの下の方に書いてある詩、これを見てものすごく言葉のセンスが尖っているなと思ったんですね。作者は高校3年生ですけれど、こんなに意識化した言葉を持っていた記憶が僕にはありません。だから、言葉に対するこの感性というのはものすごくいいなと思っていました。

堺東高等学校の作者である大名くんは、「言葉にはぜつたい裏の意味があつて、それがジャンプするところへ行くか」ということを非常によく知っている。一方でそれに対して、「言葉遊びに墜ちすぎているんじゃないか？」という意見も出たんだけど、僕は、それはスポーツで言うところの「バネがある」ということだと思いました。最後まで言葉遊びでもって論理を展開していくという方法論については、ものすごくいいなと思ってたんです。ただ、じゃあ舞台は面白いかというと、ちょっと作者が全幅の信頼を置かれ過ぎていていいのか、俳優なり、演出者が台本をどう見せようかという時に、言葉をちゃんと聞かせようとしすぎたんじゃないか。本当は大名君が書いた

言葉が、舞台上で試されていかなければいけないと思っただけです。つまり、「そんなに面白く聞こえるわけないだろう。」と役者はやんなきゃいけない。作者はいや、面白いんだ。」と書いているわけだから、その間に笑いが起こってきたりする。そのように舞台上で行われていることと台本の対立がなければ駄目だと思っただけです。俳優というのは台本に書いてあることを一回自分の体に入れて、吐き出さなきゃいけない。そういう意味では、ちょっと世界が沈静したかなあ、本に書いてあることは、もっとバネがあつて、ジャンプしてどどん飛んでいくのになあということを感じました。

上演6 「パレット」の批評より、関連部分転載

「ジュン」で言い残したことを言います。「ジュン」についてはいろんな人がいろんなことを言ったんですが、大名君には、一度、言葉遊びをやめて書いてみるということを試してほしいと、僕はすごく思うわけです。作品の後半で、沖繩のことやおじいさんのこと、自分の決意であるとかも大名君の書いた本質的なものすごく繋がっているというふうに僕は思っているの、そうすることで誤解なく伝わると思っています。

西村：岩崎先生はすごく褒めていらつしやいました。他の先生方も、すごく才能を感じて、「すごい、すごい」って。岩崎先生は、現在、大阪の実験演劇界では三本の指に入る人ですけど、彼に初めてあつたのは大阪芸大の1年生の時だったと思います。だから、高校3年生のあなた方とほとんど変わらない時です。あれから、ウン十年、大変苦労されて、今では押しも押されぬ方になられています。だから、この中でも、絶対何人かは、親泣かせになるんじゃないかなって思う、すごい人に今回は会えました。その中でも、大名君は「ああ、この人、才人だ。」と感じ

させるものがありました。才人だから、どうせケチをつけてもやり続けてくれるに違いないので、言いたいことを言おうと思います。

一つは、いろんなことに、形式や手法にこだわっている割には、本当の意味で、彼には自分のこだわりがないのではないかと疑っております。是非、次作で反論してくださいね。何故かというところ、たとえばこの作品は「純・旬・順・潤」と四つの漢字が出



ましたよね。当然観客は、この「ジュン」にまつわる語呂合わせが、何か世界を運んでいくだろうと思っただけです。でも、「何とかを順に言ってくれ」と言いながら、胸を「ジュン」と鳴らして「1個しかでなかった。ここらで思いつきなんですね。確かに語呂合わせにもいっぱいセンスはあるんですけれども、結構こだわって語呂合わせがある間に何があつたかという疑問です。たとえば「シアワセはシワセヨカ、シアワセかなかなか辞書で引いても見つからない。」というところから始まっていきます。じゃあ、この人は「幸」と

いう漢字、音にこだわっていくのかなと思つたら、途中でいろんなことがあって、「苦瓜の苦いという字は若いという字に似てるわ。」とどこかで聴いた歌謡曲みたいなことが出てきたり、まあ、そのことにこだわることになっているなあということは分かるんだけれども、そのこだわりが薄いんです。題名がそうだから、当然、語呂合わせで行くもんだと思つていたら、途中から「意識・無意識」みたいなことが入ってきたことも1つです。何でこんな手法を取るのか、その手法を取る以上は絶対に出なければならぬ自分があらずなので、そのことにもつともつとこだわってくれたらと思いました。そして、本当に怖いんです。現在の実験演劇の人たちは「こわあ」って感じになると思います。

それともう1つは、いろんな手法をチロチロチロ知つて、何でも知つて、全部使っているんですね。たとえば、「A Side」という横を向いて自分の内心を話すやり方、「Story Theater」という、本来は役をもらったら即興で演じて、それを観客が批判的に見るプレヒト的な、異化的な方法、それから何と「Stretchor」という唱和も出てくるし、知つてゐるのか偶然出るのは分からないんですけれども、とにかくいろんなことを知っている。知つていながらそのことに対してのこだわりが薄い。才能は溢れているのに、それがまだこれから丁と出るか半と出るかは分からない。そこがもつたないの、できればいろんなところで破綻してもいい、「若いということ」は苦いかどうか、本当にそうか。「ということ」をこだわってほしいと思います。

顧問：私もこの脚本はとても面白く読ませてもらいました。個人的にはとても好きな脚本です。最初に脚本をめくると、「登場する私の粒子」と書いてあって、

素直に「登場人物」と書いていない辺りがとてもいいですね。「私の粒子」ということは作者の分身みたいなものがいっぱい出てくるのかなあと思つて観てたんです。観ていると、「ゴージャ」という登場人物、登場野菜が出てくる。トマトやキュウリじゃなくて、ゴージャが出てくる辺りがなかなか面白いなあと思いました。次に場所を見てみると、「バーヤ病院や青空や苦瓜畑もしくは無意識の中、あるいはある人の部屋の机」というように書いてあって、演出する人が読むと、どうしていいのかわからないというような非常に困った話になると思つんですが、これはたぶん作者が演出家に挑戦状を叩きつけているんやろな、喧嘩を売っているのかなという感じで書いてあります。こういう非常に面白い設定で書かれています。

中身を読んだ段階でもう一つよく分からないところもいっぱいあったんで、舞台を観せてもらつて、舞台で何かがつかめるかなと思つてみていたんですが、残念ながら演出されている方も、この脚本の面白さを十分活かせていないのかなあと感じました。たとえば舞台装置を見てみると、脚立がポンと、一見投げやりな感じで置かれている。非常に簡素でいい面もあるかも知れないんですが、もう少し高さのある装置であるとか、もう一工夫ほしいところでした。照明も平板にならずに、いろんな所からの照明を考えてみてほしいんじゃないかと思いました。ですからこの脚本をもう一度やる機会がありましたら、十分に演出効果を考えてやると、とても面白い舞台ができるんじゃないかと期待しています。

演技についてはいっぱい駄洒落が出てきますので、なかなか演技が難しいと思います。だから、スピーディーにテンポよく演じて、少々滑つても構わない、十回に一回くらい笑つてもらつたらいいという気持ちでスピーディーにやっつけていくのがいいんじゃない

かと思いました。実際の舞台を観ていると、非常に丁寧言葉をしやべつておられて、脚本の台詞を正確に伝えたいというところに視点がいつていると思いましたが、言葉遊びの部分をもつと活かしはどうかと思いました。まだまだ未完成な舞台かなと思いますけれども、今後に期待して、もつといい舞台に仕上げてもらいたいと思います。

2000年11月25日(土) 講評
上演6 「パレット」

西村：このことは、作者が一体どれくらい意識しているのかわからないけれど、していらつしやらないのかわからないけれど、本当はすつごおーい喜劇になるのに、惜しいと思つています。ひよつとしたら作つていらつしやる方もそうかも知れないのですが。でも、語録名人、想像力人間からいうと、この作品はすつごおーい喜劇になるんです。そこが惜しいと思つています。「そんなことを考えてなかったよ。」というのだったら、また教えてください。

自分で勝手に触発された想像をいいます。とにかく面白かつたのは、トイレの音から始まって、トイレの音で終わり、そして初めの食事は朝ごはん、始まって、最後のプロローグも朝ごはん、こういう生活が何とかかんとか言いながらまた続くよと暗示している。その間は全部夕食ですよ。そういう構造が、要するに現代日本の日常生活なんです。

私の勝手な受け取り方ですけど、出てくる人も現代のお父さんですよ。息子が「芸大」美大を受けたい。」と言つたら、「わからん。」と言つてですね。もうちょっと前の世代の、つかこうへいの描くお父

さんぐらいだったたら「意見なし」です。私たちの親ぐらだと「断固反対」。美大行くだの、演劇に進むなんて断固反対。でも、そういう時代は親が反対するから子どもはかえってやりやすかった。つかこうへいの世代の親は物わかりがよすぎて、「君のいいように進めよ。」と言われたんで、子どもとしては困ったんですね。現代の親はもうちょっと複雑怪奇で、口では「わからん」と意見を言わないで、でもちょっとはお酒を控えてみる、いざとなったら学費ぐらいは出してやるうというようなお父さん世代ですよ。万年平社員で、もうちょっと前の団塊の世代みたいに、競争に勝って係長までは何とか行こうとは思っていないんですね。あんまり無理な仕事だったら飯病でも使って休んで、一応の年金生活に入ればいいと思ってるんです。息子もそうです。息子も絵をやりたいと一応言ってますが、見ていたらB4のスケッチブック一つ持っているだけで、「この辺で空を描きたい。」って言う。彼がどのくらい本当に美大に行きたいのか、そのために何かやっているのかが全然見えてこない。でも、今みんなそうで



すよね、親から「何かやりたいものを持ってよ。」なんて言われている風潮があるし、文部省なんかからも、「もう詰め込みはやらないから、みんな好きなものを、やりたいと思うものを持ちなさい。」なんて、おだてられたりして。そういうところから見ると、本当にやりたいかどうか分からないのに、一応口で言っている怖い子ですよ。そう見ると、現代の男子の姿というのを、作者が意識しているかしていないかは分からないんですけど、ものすごく現代というものがよく出ています。それに対して、そんな男の姿をじっと黙って見ていた長女がピシッと一言、「こはん誰が一体作ってるのよ。」というところから、芝居がガラッと変わっていくとかが、面白いと思います。また、お父さんやお兄さんがちよつとお世辞ぶつて、優しい言葉をかけるところ、「俺が変わるから、」とか、「曜日は何とかするから」と言っても、知らん顔してますよね。その辺もすごく面白くて、台詞で気持ちなんてしゃべってなくても、現代の女の子が見えてくる。

そんなふうには現代日本を鋭く風刺した喜劇だと見えたんです。でも、そんなふうに見えなかった部分もあつたりするところが、惜しいなというわけです。岩崎：「パレット」は先ほどの「ジュン」とはすごく好対照の作品だと思います。「パレット」という作品は、すごくよく家族のことが描けていると思つたんですね。きれいに成り立っている作品だと思う。もう少し完成させるにはどうしたらいいかという、せっかくならだけダイニングのセットを組んでいるんですから、転換的役割を果たす路上のシーンをどうするか問題ですね。どうしても、ピンスポットで抜いたって、なかなか納得してくれないんですよ。じゃあ作者は何を考えればいいのかと言つたら、食事

と食事です。全部つないでいるわけですけど、あいだの時間があんまり描かれていないですよ。そうすると、「路上を歩いて展開しなきゃいけない会話を、家に遊びに来てたということにしたら無理なんだろうが、そうしたら延びちゃうんだらうか、いや、でもそういう方が見やすいな。」ということ、いっぱいいっぱい考えてほしいんです。すべてのシーンが、みんな仕事に出ていく前、あるいは帰ってきたあとという具合に繋がれていったんだけど、じゃあ、この家族は日曜日や祝日はどのように過ごしているんだらうということに、僕は非常に興味があるわけです。最後の方で、日曜日のシーンなんかを書くと、その日常がどっちに向かっているのかなってということがもう少し分かりやすくなつたのではないかなと苦言を呈しつつ、この人は大名君とはまた別のベクトルで演劇に向き合つてて上手い作家だなと思えました。

あと演技面なんですけど、作品と演技がうまく対応していると感じました。日常のディテール、細かいところがよくできています。たとえば、由岐さんがお父さんとお兄さんの飲んだビールを片付ける時に、缶を振つてから捨てるんですね。ああいうことは演技ではなかなかできないことなんです。そういう演技の細かさが、実は最後の由岐ちゃんの爆発を生んでくる場所に繋がつてるところなんかが、「ああ憎い！」という感じでした。なのに、食べ物に関しては何にも出てこなかった。あれだけ飾られているんで、エビフライも見たかったなあと、ケチヤップは出てたけど、オムライスも見たかったなあとかと思うんです。カレーライスもやっぱり分からなかった。何か子どもが、あるいは男の子が好きそうなものばっかり作っているっていうのも非常に面白かつたんだけど、あれは実際のものを使うと、

舞台が、あるいは裏方が大変なことになっちゃうのでおもちゃでいいと思うし、口に入れちゃうとまた演技も大変になると思うんだけど、何か具体的なものを形に作ってやれば、もっと面白いシーンになったんじゃないかと思えます。

顧問：「パレット」 これもよかったですねえ。何かポイントとして、後味がよくて、スツとして、朝なのに、食事ばかりのシーンが出てきたんですけども、見終わってからも胃がもたれていないという感じでした。平凡さが生み出す一つのリズムを感じさせる作品でした。特に、食事の繰り返しがあつたとありまして、最後にエンゲル係数という言葉が出た瞬間にコケるところが心憎いなと思いました。

また、落ち着きのある演技で、家族のつながりもよく分かりました。何よりも沈黙のシーンに耐えられるんですよ。こちらも息をのんでしまう、すごく意味のある沈黙だという気がしました。それと、「パレット」という題名について、「テーブルがパレットなのかな。」「このメンバーがパレットなのかな。」と思ったりしました。また、テーブルにお母さんの席が用意してある、これも憎いなという感じがします。

ただ、生徒二人の会話がぼけてしまつて惜しいなという感じがあると思う。それから、暗転がもったいないですね。それから登場人物では、雅也、和也、お父さんを中心に非常に楽しい。由岐は一つの要の役ですが、和也は等身大の高校生です。雅也は出た瞬間に、これはきつと出世はできないなというサラリーマンだと分かる。お父さんは、まあなんとか生きている。お父さんのシャツが全部出てしまつと高校生になつてしまつんですが、後ろだけ出るとどこかのお父さんだなつていう雰囲気があります。

ただ、和也のスケッチブックなんですけれど、やっぱり夢なんで、でっかい方がふさわしいだろうなと思えます。それから、ここまでリアリティーを追求してくると、食器棚の中の食器は使わないのかなとか、アクシデントで落ちたお箸を、なんで洗わないのかなとかが気になりました。普通なら洗つか拭くんですが、もし洗わないんだつたら、盛りつけた箸を「何するんだ。」という雅也なんかの一言があつても、また面白かつたかなと思えます。ああいうアクシデントも日常的なもの一つなんで、そんなのも面白いかなと思えました。

ただ、全般的なまとまりはセットで空間が締まつていてとてもいいと思えました。そして最後は「フロムA」で舞台をボンと壊してしまつ。そんな感じで、審査員一同、おいしくお茶を飲んで幸せに終わりました。

上演7 「ひとりぼっちじゃない。」

岩崎：この作品も関西弁でした。和歌山弁もいいですねえ。「あのよー」と尻上がりになるイントネーションは、僕があんまり知ってる言葉じゃないんだけど、なんか温かいというか、そういう力が舞台からやつてくるんです。だから、実際自分たちが使っている言葉というのは舞台でもすごく強いなと思えました。

先ほどの「パレット」でもお母さんがいないという設定でしたが、この「ひとりぼっちじゃない。」もお母さんがいない話ですよ。こちらは「お母さんがいなくなった心の痛みを、誰かを救ってやること」によって、自分の中の母親に出会う」というドラマとして、僕は観ることができました。だからその意

味では、ドラマの構成も非常にうまくいっている。最初、紗幕の前でお母さんから送られてきた手紙があつて、最後でまた、その手紙の続きを読むところに戻るといふ構成になっている。場面数の多い高校は、この構成を勉強した方がいいと思います。完全な一幕だったと思えます。つまり、同じ空間・同じ時間の途中ですべての事件が起こっているんですよ。これは演劇的にはすごく重要なことだと言われています。



した。

それから、前半はすごく楽しいシーンが多かったですね。あの少年もとても楽しかつたし、実際の演劇の稽古に入るところのバリエーション 幕間交流の時に、「即興でやってみて、選んで決めました。」と言っていたけれども、には、このように大会を開いてやっている演劇そのものを批評しているところがあると感じましたし、自分たちが一生懸命稽古していることそのものも面白がつてしまっていると

これができると、非常にお客さんを舞台に釘付けにしておきやすいんです。暗転でとぎれなくてすむんですよ。そういう意味で、きちんと劇というものが描けているなあと思っています。

見えて、ずいぶんお腹を抱えて笑わせてもらいました。そして、犯人探しになるんですが、これも意外な犯人が浮かび上がってくるのは、台本を書く時に、設計図をきちんと作られたんだらうなど、僕は思いました。これも他の先生と論議が別れたところですけど、犯人探しをしていて、結局犯人が見つからない。そして、みんなが出ていったあとに、部長さんが、「あなたが犯人じゃないの？」と言って、犯人を知っていたということが分かってくる。そしてすぐお互いの苦しい状況 万引きしたとか、その子の家庭の状況とかが浮かび上がってくるというように、時間性のうまさ、進め方のうまさがあつて、大変よくできた作品だと思いました。ただ、最後のシーンは、これも好みだと思っんですけど、もう一シーンあつてもよかつたんじゃないか、という気が僕はしています。お客さんが見ていて、じんわり来ている気持ちをごまかすまい構成なんですけど、せつかく卒業の日の話ですから、紗幕の向こうで、会話は三つか、四つでいいので、何か言葉を聞きたいという気がしました。あるいはまた、紗幕の前から、一旦、袖を回って向こうの空間に入りますが、紗幕が上がっていく下をくぐって前の絵が入っていくと、過去と現在とが同一平面上でつながって、いい効果をもたらすかもしれないということを考えながら観ていました。素敵なお芝居でした。

西村：とても上手に、よく考えられている作品だと思いました。一番最初、紗幕の前で卒業証書を持っていた女の子は、お母さんがいないというシチュエーションで、最後、同じく紗幕の場面では、本当に卒業

したということだと思っんですね。本当に高校生を卒業する、越していくという芝居であつて、なかなかうまく、よく考えられた作品だと思いました。ただ、なかなか難しいのは、「ハルカ」に関連して、「破稿 銀河鉄道の夜」のことを先生が仰った時にピンと来たんですけど、例えば、「ハルカ」では救急車から始まる、ここだと、お父さんとお母さんが離婚しているというシチュエーションで始まる。また、この場合だと泥棒があるなんていう場面で、「私も昔、万引きをした時に、ある友達が」でも、友達だよ。』と言ってくれたことでとても助かった。だから、あなたを別に犯人として挙げる気はないのよ。あなたはどつしたいの？ みんなに謝りたいの？ そう、じゃあ、謝りましょう。』と言つたところで、お辞儀をして終わらせますね。芝居としてうまくい、すんなりしていると思っんですけど、先生が仰りたかつたことは、「破稿 銀河鉄道の夜」では、阪神大震災で被災した6000人の死者を背後に持つて救急車を使つたり、確かあの時は、阪急電車を銀河鉄道に見立てたんでしたね。そんなふうには、「死ぬ」とか「殺す」とかという恥部 誰にも言えないことを誰かに言う場合に、すんなり言ってしまうのはどうなんだろうかと、ということだと思っんです。確かにどこからも非難はできない、「万引きした時に、私に向かつて決して咎めず、『友達だよ』と言つてくれたことは嬉しかった。」ということに、決して反対はしないんだけど、こんなふうに審査評をさせてもらったから、たまたま印象に残っているけど、その芝居を見て、「うーん」と思いつつ劇場を出て、十メートル歩いたら、その芝居を忘れちゃうかもしれない。だから、こういうシチュエーションにする時、「私もいつばいミスをした、万引きもした。」と言つことで、本当に相手が連帯できるのかどうかを考える必要が

あると思います。そのことで相手が大人になれるのかということ、すんなり探したり、頭で辻褃を合わせたりするんじゃない言葉を探し出せたらいいなと思いましたが。それは、無い物ねだりかもしれないけど。もしそういう言葉にぶつかったら、客席にいる私たちも本当に変わるんだらうと思っます。頭だけで、ヒューマンズムで分かつちやいけな思っつんですね。いつもそついうことをやってるから駄目なんだという自戒を込めて、そつ思いました。

顧問：熊野高校のお芝居には、非常に不思議な魅力があつて、その雰囲気はすごく惹きつけられてしまつ。「なんか知らんけど、このお芝居いいよなあ。」と思っせてしまつ魅力がありました。

では、どうしてそついうものが醸し出せるのかと考へてみたんですけども、一つには、装置がよくつたと思っます。この熊野の部室は、ある種それ自体がメルヘンチックなイメージを持っていて、下手にあつた木なんかは最初、「あれはどこなんだろう、外かな？」と思わせるようなところがあつて、古い小学校にありそうな木のイスが、いろんな色で塗られて置いてある。なんかこれだけで舞台空間の中の不思議なイメージを作つていて、ムードを作るのに非常に成功していると感ずりました。

それから、演劇部の人たち一人ひとりの個性がきちんと描かれているところがとてもよかつたと思っます。3年生が部長の夏樹さんと彩さん、体が弱くてちよつと力がなくて鈍くさい浩司君、それから遅刻が多くてサボりで文句言いの雄一君、2年生のすぐおいしいキャラの薫君、そしてサクラさんと英理子さんの二人、さらに1年生の千尋さんと愛さん。この二人はとても頼りなげで、いかにも1年生という感じで、3年生との対比が非常にはつきりし

ていて、こういうクラブはあるやるなというリアリティがあつたと思います。

不満としては、夏樹さんはちょっと出来過ぎかなあというところです。独りで語りをするシーンで、

「私は万引きしたことがある。」と人を非難する前にまず自分のことを語って、つらさを知っている人間のやさしさが夏樹さんからすごく伝わってきて、この台詞はすごくうまいんですけど、うまいだけに「この人、汚れてない人だなあ。」というふうに感じてしまう。本当は中学生の時に荒れていた時期もあって、万引きもしていたと言っているのに、スーパーウーマン過ぎるために、信じられない気がするのがちょっと惜しい。夏樹さんが、過去のことをもう克服してるといふ設定なんでしょうけれども、ちょっと安定しすぎていて、もう少し揺れとか葛藤とかがあつたら、もう少しと深みのある芝居になつたのではないかと思いました。

最後のシーンは、私はすごくうまく作つてると思います。一幕で、ある十月の放課後の演劇部を描いていながら、最後に紗幕の後ろで謝っているシーンがある。ただ、幕が降りるのがちょっと早かったかな。もう少しそれを見て、味わっていたいなという感じがしたくらいラストも非常にきれいに出来ていたと思います。

上演 8 「眠れる時代よ！」

西村：この作品は、今までの概念、あるいは古い世代から見ると、当然男の子が書いたものだと思つたのに、書いたのがマイさんという女の人だと聞いて、びっくりしました。森首相なども「IT革命」と言っているように、情報という言葉が氾濫しているけ

れども、その中身を知っていないとやばいぞというところをきつかけにしたと言っただけですね。そのセンズに「すごいぞ、とっても素敵だなあ。」と思つたんです。

昔から女の子は社会や歴史に関心はないと言われていたのに、全然世の中が変わつてきたなあと感じられて嬉しかったです。今の情報化社会は、「ものを買わせよう、機械を作つて何かを売ろう。」というために発達している側面が強くて、自分が孤独で、友達に欲しいという人がたくさんいるからIT革命を起こそうとしているわけではない。また、情報の重要性をいいながら、このような昔の朝鮮人殺しの話を知ろうと思う人のために、機械などを発達させてりしているのでもない。でも素晴らしいのは、そんなふうにも、ものを売るため、消費させるために作られた機械を、幸いにも逆に使う人が出てきて、「情報化社会といいながら、どうして朝鮮人問題を知らないの？」ということになるということです。その精神の持ち方が最高でした。

私は日本の近代劇の歴史の中で、日本の権力を持つた男性が何をしてきたかということについて、近代劇はちゃんとした収穫を残してないと思う。たつた一人、わずかに秋元松代が「村岡イヘイ自伝」という喜劇で、男性が侵略戦争にどのように力を貸したかということを書いているだけではないか。その意味で、第2、第3の秋本マツヨになって欲しいし、作品も読んでみてください。

すごく素敵な作品で、絶対に書き続けて欲しいから最後の結論について一言言いたい。最後の結論で、「2003年には教科書が変わり、このことが消されそうだという危機感があつて」という台詞も聞かれました。「母国の犯罪を、母国の罪を知つたら、命もこんなに軽々しくは扱われないだろう。」というの

が、この作品のテーマですが、つかまえ方が少し違うと思う。今は、母国の犯罪に追従した人が、IT革命だなんて言っているわけだから、「知つた」からといって命を大切に扱うとは限らない。かえって、知らない人の方が、命の大切さを知っていたりする。その辺をもう一度考えてみてもらつて、結論をありきたりなものにしないで欲しい。

岩崎：この作品は地区大会を勝ち上がったときに、時代考証については随分と言われたらしいですね。過去の出来事を書くことと思つたら、その点はつかれるところなので、研究していかないと仕方ないと思います。作家は資料を集めて書いて、その資料に責任を持って答えなければならぬことも出てくると思つし、その事は十分わかっていると思います。

僕がこの作品のどこがいいかというところ、書いていける方向がいいと思うんです。歴史は隠されちゃいけないんです。僕自身もそういうことにすごく興味があつて、去年も『日の丸・君が代』が簡単に法制化されたことに対して、僕は違和感がある。」という芝居を書いたんです。そこでは、現代の神社が火事になつて、宮司さんが妄想の中で、かつて兵隊として戦争に送り出した若い人たちに対してどうしようかというようなことが出てくる。そこにどうも沖繩出身者とおぼしき人が絡んできてという歴史をドラマの中で描こうと試みたんだけど、なかなか歴史を扱うのはもどかしいんです。言いたいことはものすごくあるんだけどドラマにならないし、見ている方もちゃんと聞かないといけないと思つて身構えてしまう。でも演劇だから、それを娯楽にしないと駄目だと思つたんです。

あなたも読んでかもしれないけれども、小林よしのりという人が『戦争論』という本を漫画で描いた

んですね。南京大虐殺というのは、あんなにたくさんの人を殺してはいないんだよということを、漫画の力を使って、おもしろおかしく、あたかも事実のように書いてあって、あれだけの圧倒的な量を読むと、「ああ、そうだったのかー」っていう気持ちにさせてしまつたんですよ。今まで、わりと学校の教育も僕たちも、「日本はいけないことをしたんだ。」と教えられてきて、それをちゃんとと言わなきゃいけないって言うてきたんだけど、その逆の側の、「自虐的な歴史的な考え方を持つのはやめようよ。」という人たちがすごく今、強くなっている時代だと思つたんです。僕はそれもすごくまずいと思うし、あなたが今回、この作品で書いたことは、演劇に関わる人が絶対に書いていかないといけない題材だと思つた。じゃあ、それをどういつふうにすればいいのかというと、面白くすることが大事だと思つた。

スピルバーグという映画監督が、アウシュビッツのことや日本軍のことについても描いていますが、彼の作品というのはきれいで面白いんです。実はスピルバーグは、映画関係者の間では、編集が粗いと言われているんです。でも、見たらきれいつながっているように見える。なぜかという、場面の切れ目から次のシーンへの音楽が実にきれいなからなんです。それを想定して、作曲家に作らせているんだとも言われています。あなたのお芝居も書いてある内容はいいんだけれども、シーンからシーンへのつながりもつと音楽で工夫ができていたりすると、見やすくなるんじゃないかと思つた。それから男性たちの演技も、本当に軍隊にいる人に見えた。でも戦争というのは本当はやってはいけないことだから、やっている人にはものすごい高揚感がある。それを舞台では見せてもいいと僕は思う。人を殺しているのは楽しいということをやらないと、その悲惨さが

伝わらないと思うから。でも、あなたたちのクラブは、これはいけないことだという意思統一ができていて、「僕たちが演技でもって、これは悪いことだと語らないといけない。」という意識がどこかにあったように思つた。戦争そのものの残酷さを表現しようと思つたら、もつとそこに近づかないと駄目だし、なおかつ、それはいけないんだということを最後に言い切つたら、力強いものになつたと思つた。

顧問：私も脚本を書きますが、戦争を扱つのはやっぱり怖い。時代考証ができていないとか、こんな戦争はないと批判されるのは怖いので、なかなか手をつけられないんだけれども、そこに敢えて手をつけた勇氣には感服します。

手法として、せつかく少年を「歴史生命恒久の刑」として、SFの世界に放り込んであるわけだから、戦争シーンも実はSFで、あの子は刑としてあそこに放り込まれているんだというような演出の仕方はなかったのか。軍人が、本物として見えただけに、逆に嘘くさくなって、「戦争ってそんなもんじゃやない。」とか、「あの階級の間が本場に一部屋にいるだろうか。」とか、上手いが故に、それが嘘に見える。だから、せつかくSF仕立てで始めたのなら、あの空間すべてをSFにしてみましたもよかったのではないかな。本当の戦争とは違うけれども、戦争のエッセンスを使って、「あの子に戦争というものを分かせてあげたい。」「命の重さはそんなに軽いものじゃないんだよ。」ということを分かせてあげたいための刑なんだということ、演出の中で、もつと工夫ができたのではないかな。そうすれば、批判もされないだろうし、時代考証云々でつつかれることもなかったと思つた。逆にうまくて、いかに戦争に見えたのでつつかれてしまった。だから、つつかれて

もうアカンと考えるのではなく、直しながら近畿大会まで来た力で、最後の演出を工夫することにチャレンジしてみてください。

上演9 「正直カメラと日記爆弾」

西村：「美術」最高でした。一番素敵でした。装置もよかったです。全部できてきた。これくらいセンスがいいのだから、たとえば、眼鏡を覗いてもう一人の人に会つてみたとか、これが今を映すんだとか、そういう言葉を逃しても、もう一人の人だということがわかるかどうか、そういうことを今後考えて下さつたら、すごくおもしろくなると思つた。ものすごく想像力を喚起させてくれる戯曲でした。今、もう一つの向こうを、今も見つめている、ジホウヤさんがそうだと口で言っている、その子が目をつぶされて今は見られないんだということになる。そういうことを感じさせて下さい。



とになる。そういうことを感じさせて下さい。

岩崎：とてもすてきでした。一つめは、最も「モノ」と関わっているなということ。 「モノ」の関わりにおいて、「美術」的に劇世界をデザインしようとしているのです。その手つきに、本当に舞台をみんなどで作るうとしているんだなという力を見ました。二つめは、この物語はスタイルで書いたのです。演劇的に成立させようという所と、モチーフになった所とがうまく一致しているところ。ある架空の全体主義国家を書いているので突っ込まれるはずがない、それがスタイルとして統一されている、白アリでちつと分けられてるんです。衣装のデザインにおいても確実に世界を作ってるんです。演劇をよく知ってると思いました。異世界というのモルイス・キャロルの「ふしぎの国のアリス」に通じる世界があるんですね。ものが逆さまになってる世界ですね。未来を見せないように、今だけを作ってる。未来を「たとえ」として出してきて、ジューズにして飲んでしまふとかいう技法、これを具体的にしていこうということ。「モノ」で飛び越えるので、ビジュアルとしておもしろい。言葉と見えるものが一致したらこんなことが起こるんだという、いいお手本でした。そこまで視野に入れて台本が書かれていることに感心しました。

全体的に構造がうまくいってました。最後に爆弾が埋まっているという所に戻ってくるが、爆発させないでおこうという明確な意志が感じられるのです。それで子どもには残酷なことをさせるといって演劇的な切り口、これは脚本と作ってる皆さんの意識がガチッと一致した素晴らしい作品だと思いました。

顧問：とてもシユールで、終わって3日くらいたったさらさらおもしろくなるだろうなという感想も出て

いました。とにかく子どもは残酷さで始まって子どもは残酷さで終わるといって、演劇でないとつくれない独特な世界を作り上げていました。

セツトのセンスがいいです。木をうまく使っています。木のぬくもりがシユールの裏面をいつてる感じ。上から垂れる幕の色もとてもいい。ただ、机と椅子の質感が違うのが残念でした。木の音で徹底的に攻めてくるのにもおもしろみがあります。

テーマは「今」ということで、暗い工場、黙々と働く者を見て、土の中のセミを連想させられます。本棚が裏返った木のイメージから、木の根っこのイメージを彷彿とさせる。このような具象化されるようなシユールさも持ち合わせている。そして、たとえばジホウヤをもう一人の自分の内面としてとらえるとおもしろいと思います。白い顔も不気味ですが、たとえば半面だけ白・黒の顔の者が、自分の内面として出てくる。イナースペースを抽象化しつつ具象化した自分がいるんな語り方を、自分自身がいろいろな立場から見える、そういう形で押し進めていくとさらにおもしろいと思います。そしてそのシユールな登場人物をどんどん増やして行くと、また味があつていいなと思います。このようにいろんなことを喚起させられた劇だったと思います。

上演10 「二百十日」

岩崎：人の結びつきの大切さを中心としたドラマでした。京都弁がよかったです。特にお母さんと八百屋さんの会話などは、言葉のぬくもりが感じられました。台詞の聞き取れないところもありましたが、とても楽しかったです。

はっきりした事件は25分もたつてから始まりま



した。それまではバラエティーに満ちたおもしろさがありました。

母さんがけんちゃんの家に行つてはだめといったところから、みんなの緊張の糸がブツンと切れてしまいました。長女の「もうたまらんわ」「もうええわ」といった一言が、人の結びつきを説明調ではなく、うまく表現しています。しゃべくりの連続が、あとの沈黙を作り出すためにあつたんだということが、あとからわかつてきました。

話の使い方がとても上手です。お母さんが帰ってくるのかなと思つたら、出前の電話がじゃんじゃんかかってきて混乱に陥れられていく。電話は理由説明に使われやすいのですが、とてもおもしろかったです。お母さんがいなくなつてやつとお父さんが残したノートが出てくるとか、ガングロの女の子が実ははつきりしたい子だったり、とてもよく書けています。特にガングロの女の子が、なんでバイトに来たか尋ねられて、「前を通つたらいいにおいがした」

といった台詞がとてもよかった。その土地の人にしか書けない台詞でした。

緞帳が降りてきて、みんなが拍手しているとき、松竹のお芝居を見ているような、異空間にいるような気になりました。

西村：「現代を見る」という意味で最も秀逸な芝居だったと思います。今の高校生は、時代はいかに閉塞しているか、未来があるかどうか、自分とはなんぞや、といったことにこだわっている芝居がベースになっているが、この作品はそうではない、人を見る目があつたと思います。

3人の娘が本当に働かない。口だけは達者、お金もらうのはかまわない、親が子を養うのは当然で、ご飯はできて当然、お風呂は入れるようになって当然で、そこで何かヒューマニスティックなことを言っても、生活はそういうものになっている。前半から、女の子たちは550円なら働く、くれなきや働かない。途中でお母さんの反乱で「二百十日」が吹くけど、またおそらくこの生活が続いていくことだろう、といったことを予想させます。全体はお母さん奮戦記で、それを味わって、女の子達がいよいよいい子になったけど、またおそらく同じ生活が続くだろう、誰を時代の被害者に行っているかをよく見えています。すばらしい喜劇でした。

大前：とても楽しませてもらいました。厨房のシーンで店の雰囲気がどんどんわかってきて、言葉が早くて聞き取れなくても、店の慌ただしさとか、女の子の騒がしい世界がよく出ていました。騒がしさの間に八百屋とかおじいちゃんとかがアクセントになっていておもしろかったです。ガングロの子とおとなしそうな子とが対照的に出てきて、人のおもしろさ

が書いていると思います。また、店を裏から見るとで、人の家を盗み見しているようで、客観的な目で見られておもしろかったです。最後の方では心が登場人物にスライドしてきて、お母さん早く帰ってきたいのになあ、というふうに引き込まれていくあたり、台本のうまさがあつたと思いました。

ただ、台風が急にやってきたというふうだったので、前半から伏線を作っておいた方がよかつたと思います。うどんを作る小道具、電話のタイミングもすごくおもしろく作られていました。

2000年11月26日(日) 講演
上演11「四月になれば彼女は」

岩崎：成井豊さんの作品ということで、原作は2時間の芝居ですが1時間にギュッと縮めて上演されましたが、2時間の作品は2時間で成り立つようにできているんですね。1時間に縮めるということ、台詞とか、いっぱい工夫なさつたということはおそらくわかりました。足りない部分を安定した演技で補っているというか、むしろ足りないのが苦にならないくらい演技は安定していたと思います。じゃあ、演技の安定って何だろうというと、それぞれの役者がそれぞれの個性の方向に向かつて演技していくということですね。この学校は声か誰一人として似てないんですね。みんなが違う声をもって、それぞれの役を演じていらっしゃる、それがすばらしいなと思いました。

途中で「お母さん」が舞台上で咳き込んだりしたですね。客席にもその咳が広がっていきんです。それくらい芝居って伝染性があるってどういうか、その役

者をじつと見てるんですね。だから自分たちが作った脚本でいい演技をすれば、感動だつて広がっていきと思うので、今度はオリジナルなものをやつていただくと、一層いい芝居ができると思います。

西村：終わったあと、10人の部員さんたちが、いろいろあつたけど、力を合わせてやってきたということが見えて、とてもよかつたです。でも、今度ぜひねらつてほしいことがあります。それは、既成演劇を取り上げたら、台本から書いている学校より、1、2か月得をしているわけですから、その時間、練習してみましよう。それは、うまくやるということじゃなくて、「どんなところがおもしろくてこの作品を取り上げたか」ということがポイントだと思ふんですね。見て、おもしろかつた、これをやりたい、これにこだわつて、これが出てくるかどうかが大切です。おもしろくする工夫は沢山あつたんです。「使用人」の人、すごくよかつたです。「おばさん」もよかつたです。携帯のところですごく工夫しました。柱2本だけで空港の所を見せていました今度は既成でも、君達が本当におもしろいと思うところにこだわつてほしいと思います。

顧問：登場人物は沢山出て来んですが、そのバックボーンが見えない。たとえば「あきら」さんと使用人(弟子)の人が、最後にうまくいくんですか、いつの間にこの関係はできてたのかなと思つたり、「おばさん」の職業とか、ちょっと見えにくかつたかなと思いました。

でも「馬場」さんの携帯の音、とてもおもしろかつたですし、「あきら」の服が、その場その場に合つてて非常によかつたし、ラストのホリがピンクになつて桜のイメージが出たのも大変美しかつたと思ひ

ます。キャラメルボックスの持つホンワカした、後味のいいムードが出ていたと思います。

上演12 「しょうてん」

西村：幕開き、6本のモアイ像を思わせるモービルの動き出しそんなセットや、手をあげてタクシー呼ぶところ、どうしてるんだとかいう謎の声がかかってきて…。初めですごく惹きつけられて、期待を持たせてくれたんですけど、あとのテンポが問題でした。たとえば、「女1」をやった人が、実に落ち着いて、舞台上に足がピタツとついてて、とてもいいのですが、この芝居ではあまりにも落ち着き過ぎて、芝居が動かない感じがして、せっせと動き回るセットを使いながら、ノーツとして感じる感じがしました。この作品は臨死体験を芝居だなんて思ってたんですね。古代少女のDNAをもらって、ひよつとしたら輪廻転生があるかも知れないし、教室行って気にかかったことなんかも出てくるみたいで、なかなかユニークな「死ぬまで」だし、死んでいくまでのまだ経験していない経験を、想像力で作って下さったわけだから、それが見ている人に伝わればよかったのに、普通のメッセージ芝居のように思わせたところが失敗だったと思います。

岩崎：顧問の先生が創作されたということですが、現代の直木賞文学なんかの、SFであるとか、大衆性だとか、つまり、みんなが楽しんで読める、見られるものをねらいつつ、人というのは一定の時間でもってどんどん死んで進んでいるんだよという感覚的なドラマとして書かれてて、そこに大変おもしろみを感じました。これは他の作品との比較でも、かなり

新しいドラマの構造ですね。つまり、位相がどんどん変わって行くんですね。そしてそこに主人公がボンボン放り出されていって戸惑っていきっていく、これは新しく、大変おもしろいと思います。

ただ、演じた皆さんと、先生のお書きになった部分で、何が一致したかというところが、もうちょっと見たかった。たとえば、古代の話や臨死体験も出ましたし、僕の好きな映画で「惑星のソラリス」のタルコフスキーも先生は使ってたらしやるのかな？ 自分のイメージで相手が現れるなんてまさにそういう世界ですし、「もののけ姫」っていうのも、娯楽として古代史を書きながら、実はこの作品で書かれているように、日本の先住民と大和民族との話なんだということも途中で語られていくわけですが、それを演じる人達が、もつと八方破れで楽しんでよかったのかなあと思ってますね。「もののけ姫」のところ、物まねをしてもよかったんじゃないかとも思います。つまり「しょうてん」というタイトルですけど、天に昇っていく、焦点をしぼりこむ、ここまではわかったんですけど、あと足りなかったのは、あの大喜利やつてる「笑点」ですよ。ここに笑いが持ち込めるともつと世界の位相がどんどん進んでいく部分が、スピード感を持って迫ってきたんじゃないかと思えます。

平塚：個人的にはこういう作品は好きなんですけど、「ソライスの炎のもとに」とか手塚治虫の「火の鳥」、諸星大二郎のSFマンガなんかを読んだと、このイメージは膨らみややすい。審査員の中にも、わかる方と全然わからないという方に分かれまして、そういうものかなと思えました。

暗示が非常におもしろい劇なんですけど、単純に途中まで見れば、死んでいく手前の夢の繰り返し、

それをエピソード型でいろいろ思い出すというふうにも見られますし、古代の少女の死、そして現代の少女の死、この二つを異次元の中で結びつけて行く…。この交錯性が見方によってはおもしろい。途中でちょっと失敗があったと思いますが、それも途中で沈黙を通してしまつと形になったのではないかな。声が少し遠かったのと、後ろの方の演技が多すぎたので、もつと自信を持って前で演技してもらえればよかったかなと思いますし、照明も地明かりではなくて、神秘的なライトを沢山使って、この神秘性、異次元に誘って行く様子を表現する、そういうのがよかったかなと思います。

上演13 「ハルカ」

岩崎：僕は三重県出身で、昔、神戸高校と合同練習したことを思い出しながら見ました。批評にしなきゃいけないんですけど、実は僕が大学に入った一年の時に高校の時一緒にやってた女の子が、自殺して死んでるんですね。で、本当にその子が何で死んだのかは、理由がわかんなかったんです。僕もお葬式に出て、その子にも彼氏がいてその彼氏が泣いているのを見ていたりということ思い出しながら見ました。だから、重なっちゃってあんまり批評になるかどうか分らないんですが。

そんな中で思ったのは、標準語でやりになりませんでしたよ。自分たちの問題として切実に差し出された作品なんで、三重弁でやってもよかったんじゃないかなと思います。その理由は、やっぱり人が死んじゃって、すごく切実な問題を扱っているにもかかわらず、みんな出てくる登場人物が説明しちゃうんですね、自分の感情を。関西語圏のどこがいいか

っていうと、説明せずに分かち合える言葉だって、僕は思ってます。自分たちが実際その神戸高校で使ってる言葉と標準語との距離を測ってもらって、もうちょっと台本が整理できるんじゃないかなという感じがしました。

というのは、最初のシーンでも、三本のサスを落として、実際死んだってところから始めて、「何でだろう」「何でだろう」ってことが何回も言われるんですけど、あれも、最初のサスのシーンで、「死んだ」ってことは後で言えばいいんで、言わないで省いちゃって、いつもやってる会話で言えばどれくらい悲しいんだろっていうことが、行間っていうか、言葉と言葉の間に見えてくるんじゃないかって思う。そうするともっと、シーンと伝わってくるものがあるんじゃないか。ということをおもいました。でも、僕は自分の思いも含めて、僕自身にとってはすごく伝わる作品でした。

最後、死んじゃった子が何で死んだのか分からないのが良かったです、僕にとっても。そういうメッセージを言われると、逆にお客さんはそこを信じられなくなったりするのも知れない。だから、多くの方が共有できる演劇だったんじゃないかなって思いますね。人が死んじゃう演劇って多いんですけど、僕らがよく生きていこうと思つと、やっぱり死んだ人のことを考えないと、生きていけないわけですからね。だから、僕は、こういうタイプの演劇はこれからも作られていっていいんじゃないかな、と思いました。以上です。

西村：今日の上演は三本ともそれぞれが力を合わせて、困難を乗り越えてここまでいらっちゃって、いろいろな思いがあったと思うんですけど、特にこの三本目はそうだったんだろうな。脚本を自分たちで作っ

て、衣装もみんな中学のつてをたどって集めたりみんなやってきて、きれいに舞台もできたし、もついうことなく満足感・達成感があったと思つたですね。これからもそういう気持ちをもっと大事にして芝居作りをやって欲しいと思います。だけど、これだけ出来るんだから、もうちょっと高望みさせていただいて、ちよつと一言お願いします。聞いて下さい。

実は「古い」手法がいっぱい入ってるんですね。例えば、サスの中で電話を受けて、電話終わった直後にそれぞれが自分の心境を言いますね。あれは、今から五十年前の木下順二の「夕鶴」という作品でそういう独白をやりまして、それから流行りに流れて、どこ行っても独白をやつて、そろそろなくなってきた手法だったんですね。古いからやつちゃいけないんじゃないかと、そういうことを知つて、使うなら意識的に使つて欲しいと思います。ある意味で、文化の成熟してきた後の世代は大変ですけど、

それから、自分の悲しみや疑いを説明しすぎ。これは何かつていうと、近代以前、人間がまだちゃんと自分のアイデンティティーというか、一人の人間という自分があつて、言ってる言葉と直結して、言つた言葉がちゃんと内心と直結するときには、自分の心をペラペラしゃべつても大丈夫だったんですね。だけど、今ほとんどはそういうのは、聞いていても通り過ぎてしまふ世の中になっています。残念ですけど。人の言葉を聞いていて、ちゃんとグサツと言葉が来るかどうか。(を考える必要がありますね)

また、人が死んだということについて言えば、例えば近代文学で太宰治が何故自殺したか。卒論でもいいと思います。何か人の自殺の原因が分かる。人間にはちゃんと理由があつて何かをするんだと思つてた時代の幸せな手法がいっぱい入ってますね。だけど、彼女たちは勘がいいから、屋上へ

行つて「死んだ理由が分かるかも知れない」といいながら結局は何にも分からなかった。(彼女たちは)そのことではさして原因追及もしないし、演出の彼女も言つたけど、何かポツカリと弁当が一個残つた空白感、何か私たちが欠けて何かないんだという空白感、これが伝えたいんだと思つたと思うんです。これを伝えるためには、感覚でちゃんと伝えるためには、説明しない。ペラペラ「悲しい」だの「うれしい」だの「あの人は疑つてた」だの言つてると(効果が無い)。言葉つてのはある意味強いから言つちゃうんだけど、いかにしてポカツと無くなった空虚感、これを伝えるか。ここに全力を投じてもらえたらよかつたと思いました。

顧問：このお芝居なんですけど、三人の、アキノさん・カズキさん・ミフユさんかな、の一生懸命な演技つていうのが伝わってくるお芝居で、その一生懸命さがすごく伝わるんだけど、時には伝えずるつていうところがあつたように思います。

後、友達を失つた気持ちつていうのをどう伝えていくかつていうことなんですけども、いろんな音響効果とか照明とかで伝えようとしてるんだけども、例えば死んだときのピアノ曲が流れてきたのとか、あと「悲しい」つていう言葉とか、それがすごく舞台の方に気持ち伝わりすぎて、ちよつと客席が一緒に悲しめないう風な雰囲気もあつたと思います。言葉を整理したりとか、ポツカリとあいた穴つていうのを自分たちの会話の中でふつうに日常を送つていく中で何か見せていたら、すごく素敵な作品になるんじゃないかなあと思います。

2000年度

近畿高等学校演劇協議会 劇作連絡会

優秀創作脚本選考結果

2000年度優秀創作脚本選考会は1月30日(火)に奈良県立信貴ヶ丘高等学校で、五ノ井幹也先生(兵庫)・安平ひとみ先生(大阪)・平野弘先生(京都)・大橋惣佐男先生(滋賀)・遊木(奈良・事務局)が出席して開かれた。(和歌山県代表幹事の谷口克朗先生は公務のため、やむを得ず欠席(選考については一任)された。)

今年度各府県から推薦された脚本、計八作品それぞれについて合評を行い、最優秀創作脚本、優秀創作脚本を選考した。その他の推薦作品については優良創作脚本となる。

選考結果

【最優秀創作脚本】

「私場所 ワタクシバシヨ」

大谷高校演劇部 作

【優秀創作脚本】

「テントと軍神像と女神像と」

夏矢沙直(兵庫県立尼崎高校・顧問)作

【優良創作脚本】

「ほたる」

甘利伊紗恵(京都府立塔南高校・生徒)作

「ひとりぼっちじゃない」

田中 円(和歌山県立熊野高校・生徒)作

「GEAR SHOCK」

すぎのき かふん(奈良県立信貴ヶ丘高校

・顧問)作

「あしたのあたし」

山岡 恵(奈良県立城内高校・生徒) 原案

高津加奈(奈良県立城内高校・生徒) 作

「ジユン」

大名光全(大阪府立堺東高校・生徒) 作

「正直カメラと日記爆弾」

益山貴司(大阪市立工芸高校・生徒) 作

【最優秀・優秀創作脚本の紹介と講評】

「私場所 ワタクシバシヨ」

大谷高校演劇部 作

高校三年生の卒業目前に、家族の夜逃げのために学校を去り、自分の名前とともに「私」という人間さえも消し、新しい「私」を手に入れて五十年を生きてきた一人の女。今は老婆となった彼女は追憶の果てに、五十年前の学校を去る日の友との空間に立っている。孫の世代から見れば痴呆の放浪の結果の幼時帰りにしか見えない空間は、五十年間、彼女が消し続けてきた確かな「私」を発見できる唯一の場所であったのかもしれない。ようやく、自分の存在している空間にたどり着いた彼女の思いに重なるように、五十年前の彼女と五十年後の彼女の孫の世代の高校生活が重層的に見えてくる。

何が伝えたいのか、作品の中心になるものをはっきり見つけられているという点で他の作品にはない魅力

があった。友達の絆を大切にしている生々しさが会話から浮かび上がってきており、二つの世代を並べたことによって話の重層性が大きな拡がりを持つにいたっている。作品を立体的に見せる仕掛けも申し分ない。ト書きがない分、現実の3人がどう置かれているのか見えてこないのだが、夢と現実の間での揺れを見せる工夫があってもよいかと思う。また、五十年後の再会というモチーフは、その年月だけで何でも許されるといって「年月」を万能にしてしまふ欠点にもつながっている。その年月の持つ重みをもっと丹念に描きこむべきでもある。

【連絡先】〒545-0041 大阪市阿倍野区共立通2-8-4
大谷高等学校 TEL 06-6661-8400

「テントと軍神像と女神像と」

(てんととまるすとびーなすと)

夏矢沙直(兵庫県立尼崎高校・顧問)作

授業の美術がなくなり、美術の先生の退職とともに校舎から追い出されて、校庭の隅のテントを部室代わりにあてがわれた美術部員たち。その場所は、やがて廃部になる運命の文化部の墓場のような場所だった。廃部を前提にした職員室からの監視・盗聴、逆境の中で部員たちはもがきながら部の存続を画策するが、やがて、力尽き、CG部への転部を覚悟する。台風が過ぎ去った日、しおれかけた部員のもとに、朗報が届く。がしかし、その結果、とんでもないことに…。

昨年の「画架を運びながら」に続いて二年連続の入賞である。決して無理をせず、日常の中からドラマの種を見つけているところに好感が持てる。話のテンポが軽快でよく読ませる作品に仕上がっている。ただ、小さなディテールで損をしているところがある。状況はあるが、人がいない。つまり、人の心が見えて

こないものである。役者としては、楽しめるかもしれないが、漫画的に見えてしまい脚本としてはその部分で楽しめないのである。3人の美術部への思いをもっと描いてほしかったし、台風のシーンなどでももっと心が描かれていけばと思われ。

〔連絡先〕〒660-0804 兵庫県尼崎市北大物18-1

兵庫県立 尼崎高等学校 (戸澤千尋)

TEL 06-6401-0643

【優良創作脚本の紹介と寸評】

「ほたる」(男3・女7)

甘利伊紗恵(京都府立塔南高校・生徒)作

誰もいない墓場。そんな奇妙な場所に集まった奇妙な集団、私立南東高校妖怪研究部少女たちは、それぞれの思いを秘め、この場所へやって来る。毎年恒例の肝試し大会をするために、墓場、幽霊、肝だめしを通して成長していく少女少女たちを描く、ファンタスティック・ヒューマンドラマ。(上演校筆)

墓地という特殊な設定の中で、一人一人の高校生たちの個性が生きて描かれている。主人公と亡くなった母親との親子の情愛を軸に、恋愛や進路をめぐって現代の高校生たちが抱くさまざまな感情も、さりげない言葉のやりとりの中からしじみと味わわせてくれる作品である。

肝だめし大会の設定は、スリルを求めた結果かもしれないが安直な発想ではなかったか。ディテールで大きな嘘・むちやな設定があるので人間が生きてこないし、出来事が突然説明的に語られるためにリアリティも感じられなくなってしまった。

〔連絡先〕〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町41

京都市立 塔南高等学校 TEL 075-681-0701

「ひとりぼっちじゃない」(男3・女7)

田中 円(和歌山県立熊野高校・生徒)作

ある高校の演劇部。卒業式の日、三年生・夏希が自分を捨てた母からの手紙を読む。そこには謝罪と励ましの言葉が書かれていた。手紙を読みながら、夏希は演劇部で過ごした日々を回想する。夏希が部長をしていたある日、演劇部で盗難事件が起こった。それをめぐるやりとりの中で、部員たちの様々な人間模様が浮かびあがった。

高校生として、自分たちの周囲を見つめ、自分たちにとって切実な問題をテーマとしている点に好感が持てる。構成上、やや難点も見られるが、舞台成果も含めて、高校生として真摯な取り組みを評価する。

和歌山弁が素朴な感じを出している自然な感じを与える。そのわりに人間が生きていないのは、母と娘にせよ、盗難事件の謎解きにせよ、告白による単純な人間和解に陥り、深みにはまらないように逃げてしまっているからである。前半が意味なく長い感じがする。また、先生や部活で遊んでいるのはリアルさの続くことに耐えられなかったのかもしれないが、書きたいことだけ書けばよいのであって、先生は出さなくてもよかったのではないかと思える。

〔連絡先〕〒649-2105

和歌山県西牟婁郡上富田町朝来670

和歌山県立 熊野高等学校 TEL 0739-47-1004

「GEAR SHOCK」(男2・女1)

すぎのき かふん(奈良県立信貴ヶ丘高校)

・顧問)作

二〇〇〇年四月末のある日、今日は一年生が一斉に部活動に入学登録をする日。ところが待てど暮らせど、演劇部の部室には新入部員は来そうにない。今年に入部者ゼロなのか？

「なぜだ、なぜ入部者がいないんだ？」それはあいつのせいかな？存在自体がとつても《濃い》あいつを一年生の目に触れないように「隔離」までしていたというのに。演劇部員たちの心に、波風が立ち始める。

筆者自身、七割以上が実話、と公言するこの作品は部活動日記的な色彩が強く、その分ストーリー性が希薄であり、脚本という観点で捉えれば構成にもう少し工夫を要する部分がある。ただ、登場人物相互の会話其自然で生き生きしている分、本当にこんなことがあったのかとある種あきれられる作品になっている。

収束性のある会話、流れ・テンポがよい。ありそうでなさそうな設定を持つてきている。物語がなく何も起らないままに日常が終わっていく。小ネタは結構面白く、軸がはつきりしていて退屈にならない。生徒があまり生徒らしくないように思える。いじめられてた話がありにも唐突に出てくるのは、作者自身書きながら「演劇部物語」か「ツヨシ物語」かで迷っていたからではないか。

〔連絡先〕〒636-0813

奈良県生駒郡三郷町信貴ヶ丘4-7-1

奈良県立 信貴ヶ丘高等学校(遊木 純一)

TEL 0745-72-4101

「あしたのあたし」(女5)

山岡 恵(奈良県立城内高校・生徒)原案

高津加奈(奈良県立城内高校・生徒)作

高校の図書館を舞台に、自分の未来の書かれた本を手にした高校生たちが未来を知るべきか否かで悩む姿を通して、高校生の抱く未来への不安と夢や希望の重さを考えていく。

超越的存在が、未来を知らせる書を与えるという手法は、比較的ありがちだが、図書館内で交わされる高校生たちの会話に生き生きとしたものが感じられ、

等身大で自分たちの姿を描くことに成功した作品であると思う。また、自分の未来が書かれた書物自体がいつのまにか自分の未来そのものであるかのよう感じられて手放せなくなっていくという着想は説得力があった。

最後に音符でもつきそつなアニメのりの会話である。会話の中で深まっていく部分がなく、語るべき方向に話が動いていかない。結果、言いたいことと設定だけで書いている感じになってしまった。たとえば、未来を知るための犠牲がない。未来を知る葛藤が足りない。未来を知る恐ろしさが単純である。こういった部分をさらに工夫して描いてほしい。

〔連絡先〕〒639-1011 奈良県大和郡山市城内町2-45
奈良県立 城内高等学校 TEL 0743-52-0012

「ジョン」(性別を問わず5人)

大名光全(大阪府立堺東高校・生徒) 作

主人公ジョンが自らの意識下に降りていく、という異界旅行的内容。空間は、無意識に始まり、バー、病院、ゴヤールの畑、そしてまた再びの無意識の果てへと。ストーリーは何のとりとめもないように続きながら、その中に登場する「記録屋」という存在によって、無意識下の自分が非常に醒めた目で記述されていく。随所に出てくる言葉遊びが笑いを誘い、気が付けば自分探しの帰着点についているという軽快さが目を引いた。

色々な登場人物は結局みんな作者自身であり、言葉遊びを抜きにすれば偉大なモノローグである。いいたいことははっきりしているようである。ただ、場面がないともたないので言葉遊びで場面を繋いだのではないか。言いたいこと、書きたいことに真剣に向き合ってほしかった。死への肯定否定を言いつつながらそこへ行かずに言葉で遊んでしまった。空間が飛ぶことに

も必然性がなく、登場人物もどこか均質である。

〔連絡先〕〒590-0113 大阪府堺市晴美台1-1-2

大阪府立 堺東高等学校 TEL 0722-91-5510

「正直カメラと日記爆弾」

益山貴司(大阪府立工芸高校・生徒) 作

近くで不発弾処理がある日、子供たちが遊んでいた父親の書斎。そこに登場したカメラを下げた「少年」は異空間に入り込んでいき、「時報屋」と出会う。異世界での言論統制に違反して「時報屋」は今を記録しようとして木ぎれに日記を残し、罰として眼を潰される。それでも、使命感を持って彼はサイレンを鳴らす。このサイレンの音が、現実世界へと少年を繋ぎ呼び戻してくる。時報屋の埋めた日記は、不発弾のようにどこか近くに埋まっているらしい。

作者は寺山が好きなのか、たいへん頭でっかちに描いてしまっている。若さがなく閉塞的である。根本的にひっくり返さなければだめだと思っているのである。つか、そのための装具を固めているように思われる。高校生のスタンスが現世でないところだけに生きてるので、話が大枠だけでいってしまい、作り物感が抜けないのである。もつ少し、少年の「学校に行きたい」思いを追ってもよかったのではないか。重苦しく作らずほのぼのとした明るいイメージでまとめてほしい。

〔連絡先〕〒545-0004 大阪市阿倍野区文の里1-7-2

大阪市立 工芸高等学校 TEL 06-6623-0485

まとめ

近畿高演協劇作連絡会では、毎年各府県からの推薦を各府県二作品程度を基準としていただくようお願いしている。しかし、今年度も昨年度に引き続き、

滋賀県からの推薦作品がなかったのをはじめ、数しても昨年とまったく同じ八作品からの選考となった。基本的に、各府県からの推薦は、それぞれの府県独自の基準に任せており、推薦作品の質の低下も避けなければならぬから、何が何でも増やしてはいえないが、昨年度から近畿高演協として表彰をするようになったこともあり、とりわけ生徒創作への受賞の機会を与えてあげてほしいと思っている。

さて、本年度の選考会で、特に多く話題に上ったのは、「言いたいことと設定だけで書く」という傾向についてである。寸評の中でもいくつかの個所で触れたが、特に生徒創作の多くが、言いたいことはあっても、それがある設定の中でただ訴えているだけにとどまってしまうていた。要するに、心が描けていないのである。お芝居は、登場人物が何らかの思いを持って、その心が何らかの理由でもって揺れたり変化していくことによって進行していくものである。人と人との関係や、登場人物の心理や、ストーリーの流れが見えず、ただ場面設定だけを押し付けたら、言いたいことだけをひたすら訴えるかたちの本では、感動は生まれないと自覚して書いてもらいたい。書きたいことに真剣に向き合えば、自然と思いや心が見えてくるのではないだろうか。要は、志をどこに置くかの問題である。

編集後記

大会直後に講評原稿を起こしてくださいと京都の先生方に感謝いたします。また上演校の皆様、大変お待たせして申し訳ありませんでした。やっとできました。

近畿高演協 広報担当

兵庫県立伊丹西高等学校・五ノ井幹也